

豊田英雄と草創期の幼稚園教育に関する研究(7)

—— 仙台区木町通小学校附属幼稚園の開設期の景況と史的位置 ——

前 村 晃

A Study on TOYODA Fuyu and Beginnings of Kindergarten in Japan (7)

Akira MAEMURA

要 旨

わが国最初の幼稚園は、明治9（1876）年11月、東京に創設されたが、その後、明治12年（1879）4月、鹿児島に、同年5月、大阪に、同年6月、仙台に開設されている。この3園がわが国幼稚園の二番手グループであるが、仙台の仙台区木町通小学校附属幼稚園はわが国4番目の幼稚園になる。

開園の前年、培根小学校の教員矢野成文と師範学校生徒庵原 俊^{いほらしゅん}は、6月から7月の間東京女子師範学校附属幼稚園を見学している。また、明治12年（1879）、同校教員大津よしちと相原春は東京の保姆練習科に留学が命ぜられ、修了後、二人は同園保姆に就任し本格的に幼児教育を展開している。

東京、鹿児島、大阪が行政主導の設置であったのに対し、仙台は小学校教師有志による設置である。

『幼稚園教育百年史』等ではこの園を公立としているが、当時の宮城県学務課の文書は「私立」と明記している。この園の設立時は私立幼稚園である。当園は東京、鹿児島、大阪の他の3園に比べ歴史的検証はまだ十分ではないが、幸い、平成21年（2009）10月、後身の仙台市立東二番丁幼稚園で『創立百三十周年記念誌 あゆみ』（当時三浦友悦園長）を発行し、豊富な資料付きで同園の歴史を明らかにしている。本稿では、この記念誌をはじめ宮城県公文書館、宮城県図書館、仙台市民図書館、国立国会図書館等に残る資料などを手掛かりに開設の経緯、保育内容の特徴、歴史的 position などを他の3園と比較しながら検証している。

1 仙台区木町通小学校附属幼稚園開設の背景

(1) 矢野成文と仙台区培根小学校教員の気風

仙台区培根小学校の教員矢野成文は、同校に附属幼稚園を開設するという計画を立て、同僚の若生精一郎の理解を得て、明治11年（1878）6月7日、東京女子師範学校附属幼稚園を見学するために旅立っている⁽¹⁾。こういう早い時期に、仙台に幼稚園設立を構想した矢野成文、若生精一郎、白極誠^{はくごく}一らの人物像からまずは触れることとする。

矢野成文は、天保元年（1830）、藩校明倫養賢堂に勤めた仙台藩士別所直栗^{なむただ}の次男として生まれている。

字は純郷、通称は連蔵、号は静斎である。天保9年（1838）、数え年9歳の時から養賢堂で漢学を学び、後、小姓組から監察へと進み、一時、藩命により奥州遊歴に出掛けている。明治15年（1882）8月の矢野成文の手書きの履歴書⁽²⁾によると、教職関係でいえば、明治4年（1871）2月5日、藩立養賢堂「三等教授」に就任するが、同5年（1872）3月13日、藩立中学校「督学」に転任し、6月16日、該校廃止に付き免職となっている（学制がらみの廃止）。

明治6年（1873）5月20日、仙台公立四番小学校「読書仮教師」を拝命するが、明治8年（1875）3月、仙台に開校された教員伝習館に44歳で入学し、約3カ月間の研修を経て、同年6月25日、仙台公立四番小学校「仮教師」から「二等権訓導」に昇進している。さらに、明治9年（1876）3月15日、同校「一等権訓導」を拝命し、明治10年（1877）12月12日には「同校創立以来教授ノ方法及百事尽力ノ由ヲ以テ本県ヨリ金五円賞賜セラル」と記している。

大村榮によると⁽³⁾、学制公布後、明治6年（1873）中に、仙台では7校の小学校が先駆けて設けられている。すなわち、同年6月15日、三番小学校（現・上杉山通小学校）、6月27日、五番小学校（現・片平小学校）、7月2日、二番小学校（現・東二番丁小学校）、7月3日、一番小学校（現・荒町小学校）、7月4日、四番小学校（現・木町通小学校）、7月5日、六番小学校（現・材木町小学校）、7月5日、七番小学校（現・立町小学校）などである。

四番小学校では矢野が初代校長（校長職はまだない。校長相当）となるが、同校は明治9年（1876）4月、現在地に移転し、培根小学校と改称され、若生訓導が2代目校長相当となる。矢野が命名した培根は儒教の古典『小学』中の「以培其根 以達其支」から採られたが⁽⁴⁾、以後、この学校では「以て其根を培い 以て其支を達す」という「培根達支」の精神を「培根魂」と呼び、同校教育の根幹としている。幼少期に基礎・基本をしっかりと身に付けさせ、将来さまざまな方面で豊かな能力を発揮させるという「培根魂」は幼稚園設置の発想とも無関係ではないだろう。明治12年（1879）4月、同校は木町通小学校と改称され、白極誠一が3代目校長となる。

矢野は、明治11年（1878）11月15日、いったん満期解職となるが、同年12月22日、学務課雇となり、明治12年（1879）3月27日、仙台区公立木町通小学校授業雇に転じ、6月、同校訓導白極誠一と協力して同校附属幼稚園を設立している。

矢野は、実際の指導にも熱心であり、本稿の資料調査中、国立国会図書館に、明治11年（1878）6月発行の矢野成文編『小学日課表用法』があることを知った⁽⁵⁾。その緒言によると「余の培根小学ニ従事スルや茲二年アリ常ニ生徒ノ緩慢ニシテ遅滞ノ者多キヲ憂」いて一日同僚と相談し、生徒の教科学習や態度などをチェックする一覧表を作成している。矢野らはこれを用いて実効ある成績評価をし、生徒のやる気を引き出そうと考えたのである。

矢野は、明治19年（1886）12月18日、東二番丁小学校准訓導を命ぜられている。矢野がいつまで教壇に立っていたかはわからないが、最晩年まで幼児教育に関する手記をまとめることに心血を注いでいる。矢野は根っからの教育者なのである。明治27年（1894）1月12日、逝去。享年64歳である。

『創立百三十周年記念誌 あゆみ』には、明治11年（1878）春頃、培根小学校の教員間で「矢野成文を中心に幼稚園設置の計画」が進められるようになったとある⁽⁶⁾。まだ東京女子師範学校に附属幼稚園が設置されてわずか1年半後のことである。

培根小学校の訓導で校長相当の若生精一郎は、明治9年（1876）6月、宮城県権令宮城時亮宛に「培根小学校へ裁縫仮教則ヲ設ケ度願書⁽⁷⁾」を提出し、明治11年（1878）4月、裁縫科を設置している。子守のため学校教育を受けられない女兒に「兄ヲ負ヒタル儘無月謝ニテ⁽⁸⁾」通えるようにしたいいわゆる「子守学校」である。矢野や若生は幼児教育だけでなく女子教育にも目を向けていたのである。千葉昌弘による

同八年六月縣立傳習學校ニ於テ小學師範學
 科卒業同月仙臺公立四番小學校ニ等權
 訓導官拜命
 同九年三月十番同校等權訓導官拜命
 同十年十二月十日同校創立以來教授、方法及百
 事尽力、由ラテ本縣ヲ金五四兩賜テ
 同十一年六月自費ヲ以テ出京各校女生徒教授手續ヲ
 巡覽且東京女子師範學校附屬幼稚園保
 育法ヲ參觀園長園信三ニ就テ該園保育
 要旨ヲ聞キ保姆近藤清女ニ從ヒ唱歌ヲ傳
 習更ニ本縣廳ニ具陳シ該園保育関係ノ書
 籍書籍花皆贈求携歸
 同十年十一月十五日滿期ニ付解職（去九年五月以來
 小學校從事タリ五年六月）十二月廿日本縣學務
 課長拜命
 同十一年三月廿七日仙臺區公立本町通小學校校
 長任ニ轉任六月同校訓導官白極誠トハ
 力有テ志ヲ募リ金若干同ヲ募集シ縣令ノ詔
 可ラ得テ同校附屬幼稚園ヲ創設爾是同
 園保育ノ外裁及諸務ヲ攝理シ當園永續
 ノ基ヲ樹フ
 同十四年十月仙臺區會ニ於テ番外ノ席ニ就キ
 從來小學校附屬園ヲ分離シ區立幼稚園ト
 ナル方及巨細ノ實同ヲ各辦
 同年十月十九日公立仙臺幼稚園長ニ結約今尚奉
 務（去十一年三月教員再勤以來三年六月前）

写真1 矢野成文履歴書（部分）

と、裁縫科では「裁縫術、育児法、養生法、珠算、帳合法、日用文⁽⁹⁾」まで教育することが構想されていたようである。

また、明治9年（1876）12月12日付で、若生は木村敏（養賢小学校教諭・仙台師範学校長兼務）ら7名で、学齡外の年長青少年のための「夜学校設立願書」を県に提出している。

若生精一郎は、大村榮の著書が記述⁽¹⁰⁾するように、弘化4年（1847）、仙台藩槍術指南の若生徳之進の第3子として誕生している。若生も、矢野、白極と同様藩校養賢堂で学んだが、明治7年（1874）2月、官立宮城師範学校（前年11月15日開校）に入学し、全科を卒業して、翌年7月19日、宮城県派遣となり、明治9年（1876）4月、訓導として四番小学校（培根小学校）に赴任する。

若生には、明治9年（1876）3月4日、伝習学校教員の兼務（月俸19円）が命ぜられている。若生は児童を愛し、児童からも慕われており、作文教育や社会科教育に熱心だったが、特に作文は丁寧な添削をするため、児童が待ち焦がれるほどの授業だったようである。

また、若生は、進取の気性を持った男であり、東北の自由民権運動の雄、河野磐州（広中）と連絡を取り合って、明治11年（1878）10月、仙台に「鶴鳴社」を設立し、明治12年（1879）、小学校訓導を辞め、宮城日報を創刊する。明治13年（1880）には、後に衆議院議員に9回当選する政治家村松亀一郎らと「本立社」を結成している。愛国社の国会期成同盟第二回大会（東京）には宮城県1330名、山形県76名の署名を持って参加し、政府に「国会開設哀願書」を提出するが却下されている。

若生は、明治14年（1881）4月、古川小学校の校長（月俸30円）に復帰するが、同年9月、病気のため辞職し、明治15年（1882）3月25日、労咳により35歳の若さで逝去している。民権教師若生精一郎は常に多忙であったが、明治12年（1879）、『宮城縣地誌要畧』を発行している⁽¹¹⁾。

ちなみに、若生精一郎の兄仙台藩の重臣若生文十郎は、会津藩恭順の説得に成功するがこの案は官軍側に拒否され、結局、奥羽越列藩同盟を進める大立者となり、後、官軍から切腹を命ぜられ、若生家は士分剥奪となる。兄文十郎も弟精一郎も熱血漢であるという点では共通していたのである。

白極誠一⁽¹²⁾もまた若生精一郎に共鳴する民権派教師であった。白極家は能の大鼓幸流を受け継ぐ家柄であり、家禄300石の名家であったが、戊辰の役後、白極はハリストス正教に入信している。明治7年(1874)、水沢県伝習所で下等小学校教授の免許を取得するが、明治8年(1875)3月開校の伝習学校に26歳で入学している。入学時、生徒代表挨拶をするが、卒業時の成績もトップである。卒業後、南材木町小学校の一等権訓導となり、伝習学校助教を兼務するが、後、培根小学校(木町通小学校)の教師となる。白極も後に教師を辞め、各県の官員として渡り歩いた後、明治32年(1899)に加美郡長となり、明治34年(1901)4月には柴田郡長となっている。明治38年(1905)1月6日、58歳で亡くなっている。

戊辰の役に敗れ、進路を閉ざされた矢野成文、若生精一郎、白極誠一らは、やや屈折した人生を歩まざるを得ないが、彼らは共通に教育に活路を見出し、女子教育や夜学校、幼稚園教育なども構想し得る先進的な教師に育っていったのである。

矢野の手記「幼稚園保姆及母親の心得」(宮城県図書館)の巻八(付録)によると⁽¹³⁾、東京女子師範学校附属幼稚園の見学には、翌年保姆の一人となる、仙台師範学校生徒庵原俊を同行させている。矢野らは、幼児保育の実際は、若い庵原に学ばせるのが適切と考えたのであろう。矢野は出立から帰校まで40日間の予定で上京するが、大村榮の記述によると⁽¹⁴⁾、矢野の申し出により若生を通じ県に対し10日間の「御暇延長願い」が出され、即日許可されている。矢野は履歴書にこの時の上京は「自費ヲ以」と書いているが、県からも実費の一部30円の助成があったようである。

(2) 矢野成文の見学と購入物

矢野成文らが東京の幼稚園を見学したのは6月から7月の間である。その頃同園には、氏原銀、木村末、横川楳子の保姆見習生3名が在園し、関信三と松野クララによる保育の「傳習」や、豊田英雄、近藤濱による保育の講義、演習が行われていた時期である。

矢野の履歴書⁽¹⁵⁾によると「東京女子師範学校附属幼稚園保育法ヲ参観園長関信三ニ就キ該園保育ノ要旨ヲ聞キ」とあり「更ニ本縣廳」に陳情して同園の保育関係の書籍、器械など必要なものすべてを入手したと書いている。また、矢野の手記「幼稚園保姆及母親の心得」には、唱歌について「保姆近藤濱ニ從ヒ唱歌数曲ヲ傳習⁽¹⁶⁾」とある。氏原の手記にも、当時実際に歌われた唱歌は数曲があったと述べていることから、矢野らも、「風車」「家鳩」など数曲の唱歌を習ったのであろう。

矢野の履歴書や手記には豊田英雄の名前は出てこないが、豊田の保育も参観したであろうし、保育をめぐる会話などもあったと思う。矢野は、明治11年(1878)7月20日、帰校するが、この時、矢野が東京で入手し持ち帰ったものは次のとおりである⁽¹⁷⁾。

幼稚園十二恩物、幼稚二人用卓子、同腰掛、幼稚一人用卓子、同小型椅子、墨板、塗板、幼稚園創立法、童蒙教草、保姆新書、幼稚園規則、教育雑誌、玩具

これらの内、幼稚二人用卓子は倉橋惣三の希望で後に東京女子高等師範学校附属幼稚園に譲られ、今もお茶の水女子大学に現存する。また、同じく同大学に残る「二十遊戯之図(複製)」も、明治11年(1878)、矢野が購入した作品の複製である。原画は同園に保存されていたが空襲で焼失している。墨板、塗板は「黑板」である。『童蒙教草』はイソップ物語や教訓話を集成した書物、「幼稚園規則」は東京の幼

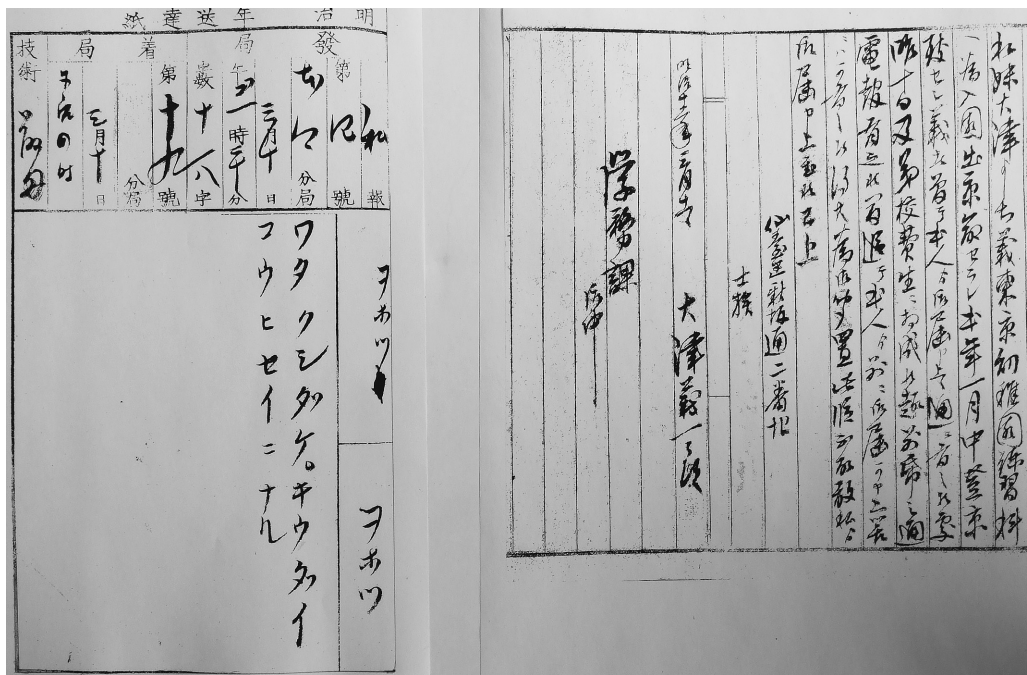


写真2 大津よしち合格電報と兄からの宮城県学務課への届け出

稚園の規則、『教育雑誌』は文部省発行の雑誌である。玩具はコマ、マリ、人形といったものであろう。ただし、ここにある『保姆新書』がどのようなものか不明である。

注目したいのは、この時点で関信三の『幼稚園創立法』を入手したとしていることであるが、このことについては後に述べる。

(3) 関信三が宮城県学務課に送った手紙と二人の試験結果比較表

東京女子師範学校では、明治11年（1878）6月27日、保姆練習科（保育練習科）を設置するが、受験生の応募が一両名しかなく、10月からの開始は不可能となる。そのため、同年10月31日、保姆練習科に給費生5名、自費生6名を置くことを決め、同年12月になって再度募集を開始している。

培根小学校の教員大津よしちと相原春は、矢野や若生の推薦があつて、明治11年（1878）12月25日、宮城県より保姆練習科の受験をするよう命を受け、二人は明治12年（1879）1月1日、仙台を出立している。二人には県から月2円の給付が約束されている。二人は、保姆練習科修了後、矢野や白極が先立って開園する幼稚園の保姆となることを期待されての上京である。

大津は母親と一緒に人力車で東京に向かっている。当時はまだ世情不穏な時代であつたから、大津は胸に日本刀を抱いての旅立ちである。子息の記述によると、大津は、途中、車夫同士が諍いをした時は車上から叱り付けたとある。出発から11日目に東京に着いている。大津と相原は仙台師範学校の同級生で仲が良かったが、相原も大津親子と一緒に人力車で上京したのかどうかは不明である。特にそうした記述がないことからすると、相原の場合は安上がりでもっと早く東京に着ける船旅を選んだ可能性がある。いずれにしろ、1月中旬までには二人とも東京に着き、矢野の紹介状などもあつたはずであるから、大津の母も一緒に東京女子師範学校附属幼稚園に出掛けて挨拶したり見学したりしたであろう。豊田美雄も2月中旬

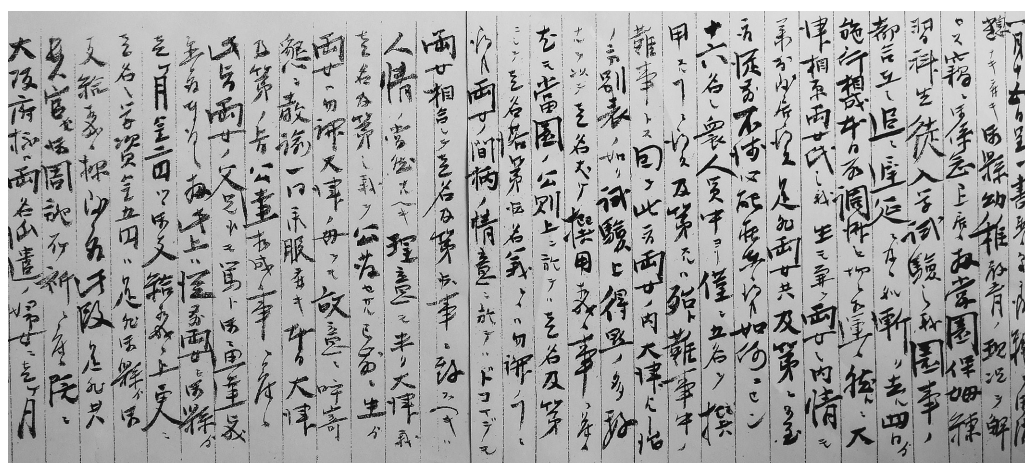


写真3 関信三の宮城県学務課宛の手紙前半部分

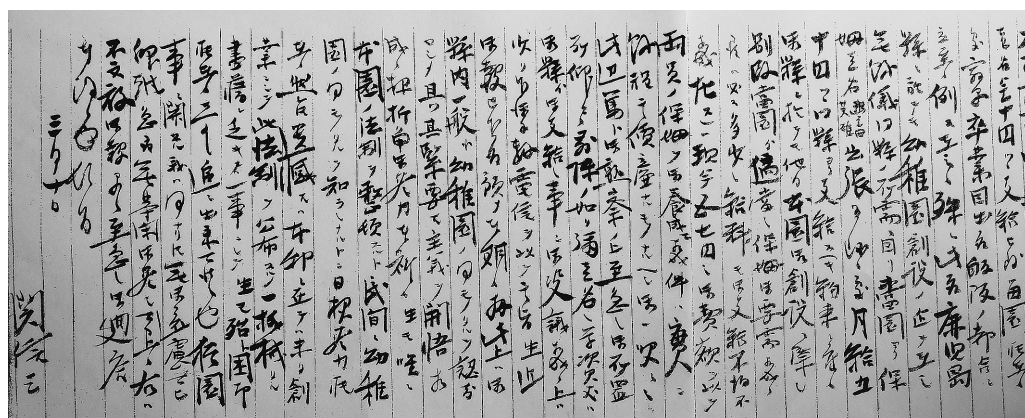


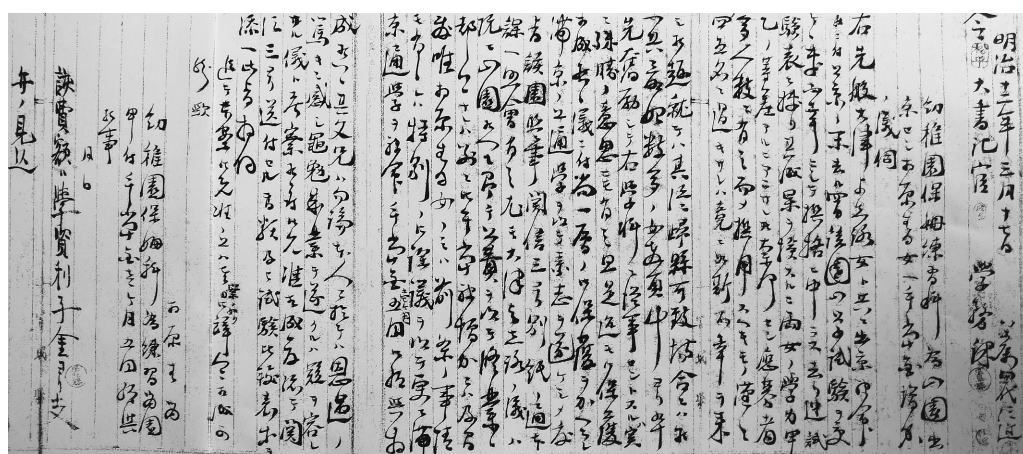
写真4 関信三の宮城県学務課宛の手紙後半部分

まではまだ東京にいたことから仙台の若い女性二人と会う機会があったかと思う。

しかし、東京の幼稚園側では準備がなかなか進まず、3月4日になってようやく入学試験を開始している。受験科目は、十八史畧、数学、日本外史、書状文、記事文、輿地誌畧、実地製品の7科目があり、各30点で210点が満点である。応募者は16名で、3月10日に合格発表がなされている⁽¹⁸⁾。

矢野成文のひ孫の矢野善孝氏は『創立百三十周年記念誌 あゆみ』の中で、関信三の手紙に触れ、その一部を紹介している⁽¹⁹⁾。「大阪府杯ハ両名派遣ノ婦女（矢野氏による中略）留園罷在候処最早卒業目出度帰阪ノ都合ニ立至候」と「殊ニ此度鹿児島縣ニ於テモ幼稚園創設ノ企テ在之無余儀同縣ノ所需ニ因リ當園保母名出張被致候（矢野氏による以下略）」という箇所であるが、この手紙は各地に幼稚園創設がなされ始めたことを関信三自身から知らせる貴重な史料であることがわかる。

しかし、明治12年（1879）3月10日、東京女子師範学校附属幼稚園監事の関信三が、宮城県の学務課宛に送ったこの手紙は、実は、重大かつ極めて緊急性を要するものであった。3月10日は合格者発表の日である。試験の結果、5名が合格者（給費生）となり、大津は及第して給費生となるが、相原はこの選から漏れたのである。大津は、3月10日午後1時30分、東京の局から仙台の家族宛に電報を打ち、同日午後4

写真5 宮城県学務課の伺⁽²¹⁾

時、仙台の局が受信、同日中に家族に合格を知らせている。電報は「ワタクシダケ。キウダイコウヒセイニナル」が全文である。翌日、大津の兄は電文を添えて県の学務課にこの件を報告している⁽²⁰⁾。

関をはじめ幼稚園の教師たちは、大津と相原の日頃の仲を知っているだけに一人を合格とし、一人を不合格とすることに忍びないものを感じたようである。しかも、総合点は大津が158点、相原が141点でそれほど大きな差があるわけでもない。数学や日本外史ではむしろ相原の方が点がいいが、実地製品（実技試験か）で「大津與志治」が30点満点であるのに対し、「相原春」は15点しか得点できておらず、ここで大きな差がついている。二人の試験結果比較表の得点以下「右之通相違無之候也」や関信三の署名などは赤い文字で書かれている。

関の主旨は、県で詮議して、前からの約束である2円に足して相原に5円を増給し計7円で滞留研修（私費生）の道が開けるようにできないかということであり、検討の結果は電信で至急知らせてくれというものである。卒業帰阪した大阪の両名などは府から月10円ずつ給付されていたと書き、鹿児島に出張した豊田美雄（手紙の中で実名をあげている）は県から月50円の給料を貰うということをあげ、宮城県が今回月5円の金を追加して二人の保姆を養成することは、相原個人にとっても県の幼児教育の将来にとっても大きな益となると言うのである。これらの動きを見ると関信三は律義で優しい男であったことがわかるが、元スパイであっただけにかなり「したたか」でもある。

宮城県の学務課は、3月17日には、県に対し、関信三の手紙と、関の手紙に同封された両人の試験結果比較表を添えて、両者の成績に差がないことを書き、相原の殊勝な意思を尊重し素志を貫徹させたいとし、学資利子金から5円を払いたいという伺を出し、結果的に承諾されている。相原春は関信三に救われたのである。重い病を抱えていた関は、この手紙を書いた8カ月後、同年11月4日、死去している。享年35歳である。

宮城県の留学生二人は、明治12年（1879）3月、他の9人と一緒に保姆練習科の授業を受けるようになる。大津には、毎月校費から5円、県から手当2円の計月7円が支給され、相原には宮城県から毎月5円の支給と別に県の手当2円が給付され、合わせて計月7円が支給されるようになった。このことは矢野成文の手記にも簡略化した記述がある。

大津よしちは、文久2年（1862）6月16日、仙台藩士大津仁右衛門の5女として生まれている。名前の表記はさまざまで、よしち、嘉治、與志治、よ志ちなどがあるがここでは「よしち」を用いることとす

る。大津は、明治11年（1878）7月9日、仙台師範学校小学師範学科を卒業し、同年8月27日、培根小学校に六等権訓導（月報金3円）として赴任している。大津の場合は、明治15年（1882）に開業医橋本^{まこと}亮と結婚して橋本姓になるが、保姆（毎月7円）に就任以来、昭和7年（1932）3月31日、同園の後身東二番丁幼稚園を退職するまで、52年もの長い間勤務している。退職時の年齢は69歳である。橋本よしちは開業医の夫との間に11人の子どもが生まれている。幼稚園保姆で多忙な橋本よしちのかわりに、病院の看護婦が子どもたちの世話をしたようであるが、子どもたちの中には、医師、研究者、東北大学教授などが育っている。クリスチャンであった橋本は、昭和18年（1943）3月21日、80歳で永眠し、北山のキリスト信者の墓地に葬られている。

川嶋保良は『昭和女子大学女性文化研究所紀要』（1990）の「明治－大正期・草の根の有職婦人像（その二）幼稚園保姆 橋本よしち⁽²²⁾」において、女性の社会的進出の視点から、橋本について聞き書きを中心に論文を書いている。川嶋は、橋本の教育観については次のように述べている⁽²³⁾。

よしちは早くから人生・社会のあり方についてある信念を抱いていたようだ。それは50年勤めた職場にあっても、また、11人の子女を育てた家庭にあっても貫かれたものである。その信念とは、一つはペスタロッチの教育理念であり、一つはキリスト教への帰依である。だが、よしちは、この二つの信念を決して露わに人に強制はせず、その時どきに人々が「なるほど」と納得する形で表出した。

また、明治15年、1歳年上の橋本亮と20歳で結婚したよしちには、6男5女が生まれ、四男だけは早世するが、10人は無事に育っている。子どもたちは「長女のみ県立高女に入学させたが、5男4女は、キリスト教系の東北学院の中等部と宮城女学院に進学させ、男子はここから二高（旧制）そして東大、京大へと進んだ⁽²⁴⁾」ということである。さらに、川嶋は長男寛敏は東京帝大医学部、アメリカ留学を経て「昭和16年から亡くなる49年まで、33年間聖路加病院々長を勤め、医学者として、また医療管理者として国際的にも活躍した⁽²⁵⁾」と書き、次男は農学博士として、宮崎高等農林、九州大学、東北大学などに勤務し、三男は船乗りになり、五男は化学者でジュラルミンの研究をし、六男は最初牧師を目指して京大哲学科に入るが、後、東北大学で法律を学んだと記述している。橋本よしちは、有職婦人として活躍しながら、家庭教育もバランスを欠くことなく配慮し得たのである。

相原については詳しいことはわからないが、相原は仙台藩士相原三郎治の娘として生まれ、明治11年（1878）7月仙台師範学校女子師範科を卒業している。相原は、明治13年（1880）7月10日、保姆練習科を修了して仙台に戻り、同年8月から保姆として勤め、明治16年（1883）までは、職員名に名前が残っているが、明治17年（1884）になると名前が見当たらないので、その頃に幼稚園を退職したようである。矢野善孝氏によると、明治32年（1899）、東二番丁尋常小学校の訓導をしていたことを名簿上で見つけたということであるから、幼稚園を辞めた後は小学校教員になったようである⁽²⁶⁾。仙台の幼稚園で関わりのある仙台師範学校女子師範科の同級生の卒業時の年齢は次のようである。

大津よしち（16歳）	後、木町通小学校附属幼稚園保姆
相原はる（17歳）	後、同園保姆
矢野あき（14歳）	後、同園保姆助手
黒沢この（15歳）	後、同園保姆
植山みよ（不明）	後、宮城養稚園（宮城県二番目の幼稚園・キリスト教系）保姆

2 仙台区木町通小学校附属幼稚園設立の開始

(1) 木町通小学校附属幼稚園設立伺

仙台の「木町通小学校附属幼稚園設立伺」は、「仙台区木町通小学校附属幼稚園規則」を付して、明治12年（1879）5月9日、木町通小学校四等訓導白極誠一、仙台区書記兼学区取締浦川盛至、仙台区長松倉恂の連名によって、宮城県令松平正直宛に提出されている。この「伺」は、田中不二麿が三條実美宛に出した幼稚園設置の「伺」の4倍超、同「再応伺」の3倍超の長さである。仙台の幼稚園設立の「伺」は次の通りである⁽²⁷⁾。

木町通小学校附属幼稚園設立伺

当校開業以来茲ニ七年今ヤ該小学区内六百余名ノ学齡生徒皆此校ニ就学シ既ニ上等壹級ニ進ミ殆ント小学全科ヲ卒ヘントスル者アリ普通ノ教育ニ於テハ稍花実ヲ結ビタルガ如シ而シテ独リ其学齡未滿ノ稚児ニ至リテハ富人ノ子ト雖凡概子無智盲昧ナル婢僕ノ手ニ成長シ貧者ノ女ハ必頑童黠児ニ接スルヲ常トシ柔情優慢拙劣汚行終日為ス所有害無益ナラザルハナシ其学齡ニ至ニ及ヒテ遽ニ学ニ就カシメ頑愚惡習ヲ免レント欲スルモ得ベカラザルヲ猶ホ草木稚嫩ナル凡之ヲ屈撓スレハ終ニ直クス可カラサルカ如シ是レニ因テ幼稚天賦ノ本性ヲ養成スル適切ノ良法ナカルベカラズ是レ西人幼稚園ノ發明アル原由ニシテ西洋各国競フテ之ヲ設クル所以ナリ而シテ近時最モ垂米利加合衆國ニ盛ニ行ハレ其經驗僅ニ數年ト雖凡其ノ成績ノ美ナル真ニ望外ニ出タリ是レ他ナシ曾テ幼稚園ニ在留セシ生徒ノ進テ学校ニ入ル者ハ其学業進歩ノ速ニシテ且品行ノ善良ナル他ノ生徒ノ隣ニアラズ是ヲ以テ幼稚園ヲ設クルハ却テ学校ノ費用ヲ減スル一助也ト当ニ知ルヘシ幼稚園ノ効用果シテ少小ナラサルヲ是ニ於テカ我文部省ニモ曩ニ東京女子師範学校附属幼稚園ノ設ケアリ本県亦当校ノ兩女教師ニ命シテ之レカ保姆練習科ニ入ラシムルノ挙アリ而シテ其卒業來春ニアリト云ヘハ実ニ遠キニアラサルナリソノ期ニ臨ミ遽然（注：読みは、きょぜん。意味は、にわか）開設ヲ計ラハ自然欠漏ノ患アルヲ免レズ幸ニ有志ノ徒數名相協同シテ開設ヲ促ス既ニ數十円ヲ釀出シ器械恩物略備ハルヲ以テ今般仙台区定禪寺通櫓丁三番地ヲ仮用シテ当校附属幼稚園トナシ先ヅ二十名ヲ募集シ保姆其外ノ職員ハ皆当校ノ教師ヲ以テ之レヲ兼務シ規則ノ如キハ一ニ東京幼稚園ノ制ニ模倣シ不日開業シテ漸次歩ヲ進メ他日普通学課ニ入ルノ予備門ト為サント欲ス依テ別紙規則相添ヘ此段奉伺候也

木町通小学校四等訓導

明治十二年五月九日

白 極 誠 一

仙台区書記兼

学区取締浦川盛至

仙台区長松倉恂

宮城県令松平正直殿

冒頭は小学校教育の開業以来7年が過ぎ、相応の成果があがったことを書いているが、白極誠一らは自身小学校の教師であるからここは実感を持って書いたと思う。また、後半にある幼児教育が小学校教育への有効な橋渡しになるというのは、フレーベル主義保育の主張するところであるが、矢野や白極もこのことに共鳴した模様である。冒頭に続く大部分は関信三の『幼稚園創立法』から借用したものである。このことから、この頃までには、矢野や白極が同書を入手していたことは確実である。

仙台の設置伺	「富人ノ子ト雖凡概子無智盲昧ナル婢僕ノ手ニ成長シ貧者ノ女ハ必頑童黠兒ニ接スルヲ常トシ柔惰優慢拙劣汚行終日為ス所有害無益ナラザルハナシ」
幼稚園創立法	「富人ノ子ハ概子無智盲昧ナル婢僕ノ手ニ成長セシヲ以テ唯驕奢傲慢ノ風ニ慣習シ貧者ノ女ハ必ズ頑童黠兒ニ接スルヲ常トシテ以テ拙劣汚行ニ陷入シ此ノ如ク富子モ貧女モ終日為ス所悉ク皆有害無益ナラザルハナシ」
仙台の設置伺	「猶ホ草木稚嫩ナル凡之ヲ屈撓スレハ終ニ直クス可カラサルカ如シ」
幼稚園創立法	「猶ホ草木ノ稚嫩ナル凡之ヲ屈撓スルトキハ其長ズルニ及ビテ終ニ之ヲ直クス可カラサルカ如シ」
仙台の設置伺	「幼稚天賦ノ本性ヲ養成スル適切ノ良法ナカルベカラズ是レ西人幼稚園ノ發明アル原由ニシテ」
幼稚園創立法	「幼稚天賦ノ本性ヲ養成スル適切ノ良法ナカルベカラズ是レ幼稚園ノ發明アル原由ナリ」
仙台の設置伺	「近時最モ亜米利加合衆国ニ盛ニ行ハレ其経験僅ニ数年ト雖凡其ノ成績ノ美ナル真ニ望外ニ出タリ是レ他ナシ曾テ幼稚園ニ在留セシ生徒ノ進テ学校ニ入ル者ハ其学業進歩ノ速ニシテ且品行ノ善良ナル他ノ生徒ノ隣ニアラズ是ヲ以テ幼稚園ヲ設クルハ却テ学校ノ費用ヲ減スル一助也ト当ニ知ルヘシ幼稚園ノ効用果シテ少小ナラサルヲ」
幼稚園創立法	「近時最モ亜米利加合衆国ニ盛ナリ聖路易府ノ学監ハリス氏曰ク幼稚園ノ経験僅ニ数年ナリと雖其成績ノ美ナル真ニ望外ニ出タリ即チ公立学校ノ教師ハ皆公立幼稚園ノ益々盛ナランコトヲ希望セリ是レ他ナシ曾テ幼稚園ニ留任セシ生徒ノ進テ学校ニ入ル者ハ其学業進歩ノ速ニシテ且ツ品行ノ方正ナル他ノ生徒ノ比ニアラズ是ヲ以テ公立幼稚園ヲ設クルハ却テ公立学校ノ費用ヲ減ズル一助ナリト当ニ知ルヘシ幼稚園保育法ノ効用果シテ少小ナラザルヲ」

仙台の「伺」は『幼稚園創立法』冒頭の書き写しである。ただ、これは安易な借用というよりは、幼少期にしっかりと根を張らせて幹枝を大きく育てるという矢野らの「培根魂」と、幼児を「キンダーガルテン（幼児の園）」で園丁が植物を育てるように健全に育てるという『幼稚園創立法』の根本理念は共有し得る世界だったのである。

「伺」の最終部分では「当校ノ両女教師ニ命シテ之レカ保姆練習科ニ入ラシムル」や「有志ノ徒数名相協同シテ開設ヲ促ス既ニ数十円ヲ醸出シ器械恩物略備ハルヲ以テ今般仙台区定禅寺通櫓丁三番地ヲ仮用シテ当校附属幼稚園トナシ先づ二三十名ヲ募集シ保姆其外ノ職員ハ皆当校ノ教師ヲ以テ之レヲ兼務シ規則ノ如キハーニ東京幼稚園ノ制ニ模倣シ不日開業シテ漸次歩ヲ進メ他日普通学課ニ入ルノ予備門ト為サント欲ス」の部分は、同校独自の文章であり、すでに保姆の育成、物品・用具の購入、土地の手当まで準備はできていることを明言しており、矢野や白極の幼稚園設置計画は相応に用意周到なものであったことがわかる。

ただ、有志が「既ニ数十円ヲ醸出シ」とあるように、すべてを「公」に頼むわけにはいかなかった同園の苦しい立場も窺える。なお、予算の裏付けについては、後述するように、「伺」の日付の三日後、5月12日付で「木町通小学校附属幼稚園維持方法」が提出されている。

(2) 校長白極誠一の幼稚園開園時の挨拶

仙台の木町通小学校附属幼稚園は、明治12年（1879）6月7日、無事開園を迎えることになる。校長白極誠一の当日の祝詞も大部分が『幼稚園創立法』冒頭部分を参考にしたものである。白極の祝詞は次のようである⁽²⁸⁾。

「人ノ幼稚ナルヤ嫩芽（注；読みは、どんが）ノ如シ。春花秋実ノ美ヲ観ント欲セバ、宜シク之ヲ園圃ニ移シ、勉メテ其ノ生力ヲ養成セザルベカラズ。若シ之ヲシテ野外荒蕪ノ地ニ生長セシムル時ハ、昆虫其ノ根ヲ噛ミ、風雨其ノ枝ヲ撓（注；読みは、たわ）マシ、其ノ花ハ浮薄其ノ実ハ委靡シ、竟ニ天然ノ美栄ヲ発スルノ期ナシ。

ココニ該校付属幼稚園ノ開業ヲ行フ。乃チ今日ハ嫩芽ヲ園圃ニ移植スルノ吉辰ニアラズヤ。欣喜并躍（注；読みは、べんやく）ノ情已ム能ハズ。敢テ蕪詞ヲ陳ブ。芝蘭（注；読みは、しらん）ノ園ニ長ズルハ荆棘（注；読みは、けいきよく）ノ枝ヲ束ヌルナリ。蘇苔ノ庭ニ生ズルハ塵埃ノ根ヲタツナリ。唱歌ノ婉婉（注；読みは、えんべん）ナルハ心神ヲ柔グベク、玩器ノ爛漫タルハ知覚ヲ発セシムベク、無用ノ遊戲ヲ実地ニ転ジ、有益ノ技能ヲ幽処ニ求メ、漸次薰陶養成シテ、他日幼童等果実ヲ結ブノ美栄ヲ歆ブコトヲ敬ミテ祝ス。」

白極誠一祝詞 「春花秋実ノ美ヲ観ント欲セバ」

幼稚園創立法 「草木ノ花蕾ヲ発シ果実ノ結ブノ栄ヲ観ン」ヲ要セバ」

白極誠一祝詞 「宜シク之ヲ園圃ニ移シ、勉メテ其ノ生力ヲ養成セザルベカラズ」

幼稚園創立法 「園丁ノ最モ老練ナル者ハ之ヲ園圃ノ中ニ栽培シ常ニ意ヲ注シ力ヲ添ヘ（前村による中略）其天工ヲ養成シ」

白極誠一祝詞 「若シ之ヲシテ野外荒蕪ノ地ニ生長セシムル時ハ、昆虫其ノ根ヲ噛ミ、風雨其ノ枝ヲ撓マシ、其ノ花ハ浮薄其ノ実ハ委靡シ、竟ニ天然ノ美栄ヲ発スルノ期ナシ」

幼稚園創立法 「荆棘葛藟（注；読みは、かつるい）ト俱ニ野外荒蕪ノ地ニ放生セシムベカラズ若シ然ルトキハ幹株屈曲シ枝葉縦横ニ濫出シ蓬草其根ヲ掩ヒ塵埃其條ヲ穢シ容姿甚ダ野ニシテ見ル可カラズ」

設立の「伺」ほどではないが白極の祝詞も『幼稚園創立法』からの借用であり、白極自身関信三の『幼稚園創立法』に目を通し、深く共鳴していたと思われる。

(3) 矢野成文の祝詞

この日、矢野も開園の祝詞⁽²⁹⁾を述べているが、白極の祝詞の3倍超の長さである。矢野も前半は『幼稚園創立法』と明治12年（1879）3月発行の関信三纂輯『幼稚園法 二十遊嬉 全』を引用しているが、後半では他府県の動向に関心を寄せ「鹿児島県ノ如キニ至リテ、既に其議ヲ決シ本年三月官ニ請ヒ東京幼稚園ノ保姆ヲ聘シ現今既ニ開設ニ及ブト云フ」と言い「全国中設立ヲ企望スルノ県々ニ少ナシトセズ 然レトモ既ニ此挙アルモノ僅ニ四カ所ニ過ギズ 然レバ今日ノ開業ハ実ニ本邦第五ノ開設ニシテ将来幼稚ノ教育上ニ於テ全管ノ面目ヲ一変スル元素タル」と述べている。矢野は、幼稚園の開業は「僅ニ四カ所」であり本園は本邦5番目の幼稚園だと語っている。矢野は京都の幼稚遊戯場も含めているようである。ちなみに、プロシアの幼稚園解禁時、松野クララは8歳であるが、矢野の祝詞中クララを「嘗テ幼稚園ニ成長セ

ル」と紹介しているのは少し気になる部分である。6月7日の開園当日は、園児は20名ほどで、来客は100人ばかりあり、仙台日々新聞（明治12年6月11日付。宮城県図書館蔵）は次のように記述している。

兼ねて報道せし木町通小学校附属幼稚園の開業式は愈去る七日施行されましたが今其の概畧を述ぶれば室の中央には生徒就業の机を排列になり其北室には幼稚が就業の硝子額并に庭園の掛図を掲げ其下には亜米利加及び文部省京都府其外本縣等にて製造せし二十恩物を陳列して縦覧を許されたり又午後一時三十分を合図に生徒は思い思いの支度をなし付添人諸とも各々その席に就き参観の衆庶は其左右を環りて堂に充満せり此時学務課の林十等属ハ室の正面に立て左の祝詞を朗読せられたり

この日は、宮城県十等属の林通の祝詞の朗読に始まり、校長白極誠一の朗読、幹事矢野成文の朗読と続いている。これが終わって矢野秋、南良、庵原俊の三人が歌唱七曲を歌って、この後園児に菓子を与えて退園させ、その後午後三時まで祝宴が続いたようである。大津よしち、相原はるが東京の幼稚園で本格的なフレーベル主義保育の教育を受け、保姆練習科を修了して、この園の保姆に就任するのはこの日から1年2カ月後のことである。

(4) 『幼稚園創立法』をめぐる謎と意義

『幼稚園創立法』は、仙台の幼稚園設置に際し大いに「活用」されているが、この本には謎も多いので、その謎と意義についても、ここで触れておくこととする。

関信三の『幼稚園創立法』は、『日本幼児教育史』には「この本は、皇子建宮の成長にともない宮内省で幼稚園を設立する計画があり、そのために書かれたと言われる⁽³⁰⁾。」とあり、『幼稚園創立法』のあとがきにも「これは関信三が、文部大輔田中不二麿の内諭によって起草し、十一年四月に浄書提出したものである⁽³¹⁾」と書かれている。「皇子建宮」は、明治10年（1877）9月23日に生まれた、明治天皇の第二皇子^{たけのみやゆきひとしんのう}建宮 敬仁親王のことである。第一皇子が夭折していたため、建宮は天皇后継者として期待されたが、この皇子もまた翌年の明治11年（1878）7月26日に夭折している。『幼稚園創立法』は「特殊ノ目的」で書かれたが、この本の所期の目的を果たすことはなかった。

上記のように、この本は、明治11年（1878）4月、田中不二麿宛てに浄書提出されたが、「特殊ノ目的」を持って書かれた「手書きの本」の写しを、提出3カ月余り後、まだ建宮存命中に矢野成文に持ち帰らせたというのは不可解である。ただし、明治12年（1879）5月9日付の仙台の設立伺を見る限り、少なくともその頃までには、同校教師の手元に同書はあったのである。関から貰った「写し」か、明治11年（1879）末『教育雑誌』に掲載された同書か、あるいは両方であろう。

戦前まで鹿児島幼稚園に残っていた『幼稚園創立法』が明治11年（1878）4月付であったということも謎である（戦前、多田鉄雄が文部省から鹿児島に出張し複写したものを本人が所蔵しているとされている⁽³²⁾）。これは「豊田美雄が鹿児島幼稚園を創るとき持って行ったものではないか⁽³³⁾」とも言われているが、豊田の東京立出は明治12年（1879）2月半ばであるから、同書が明治11年（1878）4月付であったということは不自然である。

鹿児島では、明治11年（1878）9月21日、鹿児島師範学校内に鹿児島女子師範学校を仮設するが、明治12年（1879）1月18日にはこれを山下町に建築し「同時に幼稚園を設く⁽³⁴⁾」（幼稚園の一建物の完成か）の記述などもあることから、鹿児島では早くから幼稚園設置の構想があったことがわかる。しかし、幼稚園の「設置基準」のようなものが皆無の状態準備を進めたとは考えにくい。したがって、かなり早い時期に『幼稚園創立法』の写しは鹿児島に渡っていたと考えるのが順当であろう。

ちなみに、保姆見習生横川楳子が両親宛に送った明治11年（1878）12月6日付の手紙⁽³⁵⁾からは、中村正直（校長）に対して鹿児島県の岩村通俊県令から強い「保姆派遣」の要請があったことがわかる。もちろん、岩村は、当時の文部卿、鹿児島出身の西郷従道にも「保姆派遣」の側面支援を強く請願したと思われる。また、明治11年（1878）11月11日、田中不二麿は関信三の『幼稚園創立法』を「文部卿（西郷従道）の閲覧に供した」（明治12年文部省年報）とされているが、これも一連の動きと無関係ではなさそうである。

さらに、明治11年（1878）12月24日、東京女子師範学校附属幼稚園では、保姆見習科の修了式を挙行するが、同日、横川楳子は同園の保姆採用となり、同日、西郷従道は文部省を去り陸軍卿となる。これも偶然の一致というよりは、東京女子師範学校側が学校行事を無理に「政治日程」に合わせたのではないかと考えられなくもない。

大阪市立愛珠幼稚園には二つの『幼稚園創立法』が残っているとされるが、一つは明治19年（1886）1月18日校正のものであり、もう一つは明治12年（1879）1月付のもので、同書の第一頁⁽³⁶⁾には、関自身これが「特殊ノ目的」で書かれたもので「普通幼稚園ノ創立法ヲ指示スルモノニ非ズ」と書き「木村末女氏」の「要需」により「更ニ被写セシメ以テ之ニ應スルノミ」と記している。『日本幼児教育史』ではこれを、明治12年（1879）1月、関から木村に「おくられた⁽³⁷⁾」としているが、「送られた（郵送）」という意味であるならば正確な表現ではないと考える。

大阪派遣の見習生氏原銀は、上京後のある日、大阪にいる医学生の子との間の子どもを身籠っていることに気づいている。そのため、氏原は半期で保姆見習いを切り上げ、明治11年（1878）8月末大阪に帰るが、木村は氏原と一緒に帰ったわけではない。そのことは近藤濱が氏原の同行者を探すのに奔走したという一件からも明白である⁽³⁸⁾。見習期間は当初6カ月間の予定であったが、それでは不十分だとして10カ月間に延長されているので、木村は当然同年12月24日の修了証書授与式までは東京にいたであろうし、豊田英雄の講義が明治12年（1879）2月上旬まで続いていることからすれば、その頃までは東京にいたとも考えられる。

『幼稚園創立法』は、明治11年（1878）12月9日発行の文部省の『教育雑誌』に掲載されたため、木村にとって毛筆書きの複写は必ずしも必要ではなかったが、大阪における幼稚園設立時の「支え」として『幼稚園創立法』の写しを持って帰ったのであろう。

いずれにしろ「特殊ノ目的」で書かれた関信三の『幼稚園創立法』は、多額の経費などの部分を除けば「普通幼稚園」の設立にも適用できる部分が多かったため、鹿児島、大阪、仙台のわが国二番手グループの「普通幼稚園」のすべての創立に役立てられることになったのである。

3 仙台区木町通小学校附属幼稚園設立当時の保育の実際

(1) 仙台区木町通小学校附属幼稚園規則

① 幼稚園の目的・入園の資格・保育料・その他きまり

この園では、「伺」中に「規則ノ如キハ一ニ東京幼稚園ノ制ニ模倣シ」とあるように、規則は東京女子師範学校附属幼稚園が、明治10年（1877）7月に撰定したものをそのまま踏襲している。しかし、僅かな違いはあるので、ここではその点に注目して取り上げていく。規則の前段にある条（條）はいずれも12条（條）で同じである。全体的に、東京、鹿児島、大阪、仙台とも同一と言って良い。

仙台の第一條の幼稚園設置の目的から、第二條の入園年齢、第三條の種痘及び天然痘または伝染病に関する條目は一部字句の順序の違いがあるぐらいではほぼ東京と同じである。

最初の違いは、第四條の定員の條にあるが、東京の大約150名のところが仙台では大約75名となってい

る（開園直後の定員は48名）。仙台では定員は東京の半分ぐらいを妥当としたのである。ちなみに、鹿児島では定員を大約90名とし、大阪では大約50名としている。第五條の園児募集広告、第六條の願書書式、第七條の付添人に関する條目もほぼ東京と同文である。

次に違いが出てくるのは、第八條の保育料の部分で、東京の月25銭が仙台では月50銭となっている。ただ、「木町通小学校附属幼稚園維持方法」の但し書きによると「当分一名ニ付金廿五匁宛収納」とある。また、同條の但し書きの部分にも違いがあり、東京では「但シ貧困ニシテ保育料ヲ収ムル能ハザルモノハ其旨申出ツヘシ事実ヲ訊問シテ後コレヲ許可スルコトアルヘシ」とあるが、仙台では「但員外開誘室ニ於テ保育スル者ハ半額ヲ収ムヘシ」となっている。

仙台の幼稚園は、明治13年（1880）4月、規則第八條を改正し、「保育料を月額、上等五十銭、中等二十五銭、下等十銭、貧困な者は無月謝たるも妨げざる者とす⁽³⁹⁾」としている。そのことで一挙に園児26名が入園し定員48名を満したと『創立百三十周年記念誌 あゆみ』に書かれている。

ちなみに、鹿児島では「毎月金五拾銭ヨリ多カラス三拾銭ヨリ少ラザル保育料ヲ収ムヘシ」とあるが、大阪では保育料は無料である。

仙台の第九條の年齢別の組分け、第十條の保育時間についてもまったく東京と同じである。第十一條の在園時間については期間の区切りに若干の違いがあり、東京では「六月一日ヨリ九月十五日マテ午前第八時ヨリ正午十二時ニ至リ九月十六日ヨリ五月三十一日マテ午前第九時ヨリ午後第二時ニ至ル」としているが、仙台では「六月一日ヨリ九月三十日マテ午前第八時ヨリ正午十二時ニ至リ十月一日ヨリ五月三十一日マテ午前第九時ヨリ午後第二時ニ至ル」（下線は前村による）としている。この区切り方は、東京だけが異なり、鹿児島、大阪、仙台は同じである。ただ、東京でも運用上は鹿児島、大阪、仙台と同じにしていたとも考えられる。

第十一條の休日については、日曜と夏期休暇、冬期休暇の他に、祭日については東京では紀元節と天長節だけを書いているが、仙台では「孝明天皇祭、紀元節、春季皇霊祭、神武天皇祭、神嘗祭、秋季皇霊祭、新嘗祭」と丁寧に書かれている。夏期休暇はどちらも「七月十六日ヨリ八月三十一日マテ」で同じである。冬期休暇は東京では「十二月二十五日ヨリ一月七日マテ」であるが、仙台では「十二月二十五日ヨリ一月十日マテ」（下線は前村による）とあり、三日分だけ長い。

② 保育科目及び保育時間表

保育科目についても、第一物品科、第二美麗科、第三知識科の三科があり、三科に含まれる子目も五彩球ノ遊ヒから遊戲に至るまで24種とも同一であるが、東京の「石盤図画」が仙台では「図画」となっている点が異なっている⁽⁴¹⁾。

保育時間表⁽⁴²⁾については若干の違いがある。保育の中身自体は一部曜日で活動の入れ替えはあるがほとんど東京と同一である。ただ、第三ノ組（年少）と第二ノ組（年中）においては、会集に続く2コマ目の30分の活動内容が、仙台では体操が週4回、唱歌が週2回であるのに対し、東京では体操が週5回、唱歌が週1回となっている。また欄外でも仙台では「但 保育ノ餘間ニ体操或ハ唱歌ヲナサシム以下同ジ」とあるように「唱歌」が加わっている。保育時間表上では仙台の方が唱歌を重要視しているように見える。ただし、明治11年（1878）当時、氏原銀が東京では唱歌は週2回あったと書いていることから、東京でも唱歌に関しては実際は仙台と同様に実践していたのであろう。

小さな違いでは、仙台では第三ノ組（年少）で形体積ミ方を「第四箱ニ至ル」としているのに対し、東京では「第三箱ニ至ル」としている。保育時間表に関していえば、仙台は大阪と同様に東京の幼稚園を忠実に踏襲しており、鹿児島（豊田英雄）が活動時間単位を短くし、静的活動と動的活動を交互にするというような独自の工夫は見られない。しかし、表4のように明治14年（1881）頃になると初期のものにだい

但 保育ノ餘間ニ体操或ハ唱歌ヲナサシム以下同ジ	土	金	木	水	火	月	
	同	同	同	同	同	会 室 集 内	三十分
	同	体 操	唱 歌	同	体 操	唱 歌	三十分
	画 解	形 体 積 ミ 方 (第四箱ニ 至ル)	計 数 (一ヨリ十二 至 ル)及ヒ体操	三 形 物 (球、円柱六面 形)	小 話	球ノ遊ヒ(第一箱)	四十五分
	至ル)	木 箸 ノ 置 キ 方 (六本ニ 至ル)	針 画	鎖 ノ 連 接	貝 ノ 遊 ヒ	畳 紙 (第一号ヨリ第四 号ニ至ル他単易ノ形 等)	四十五分
	同	同	同	同	同	遊 喜	一時半

表1 第三ノ組の保育時間表

第二ノ組 幼稚園満四年以上満五年以下	土	金	木	水	火	月	
	同	同	同	同	同	会 室 集 内	三十分
	同	体 操	唱 歌	同	体 操	唱 歌	三十分
	歴 史 上 ノ 話	木 箸 ノ 置 キ 方 (六本ヨ リ廿本ニ至ル)	計 数 (一ヨリ廿二 至 ル)及ヒ体操	形 体 積 ミ 方 (第三箱第 四箱ニ至ル)	博 物 或 ハ 修 ノ 等 ノ 話	形 体 置 キ 方	四十五分
	形 体 積 ミ 方 (第四箱)	畳 紙	織 紙 (第十三号ニ 至 ル)	縫 画 (三倍線等)	針 画	図 画 (三倍等ニ至ル)	四十五分
	同	同	同	同	同	遊 喜	一時半

表2 第二ノ組の保育時間表

ぶ変更を加え、活動単位時間を縮めている⁽⁴³⁾。

仙台の幼稚園において最大の注目点は、明治11年(1878)6月の開業の時点で、東京の幼稚園を短期間見学した幹事矢野成文と保姆庵原俊、保姆南良、保姆事務(助手)矢野秋(あき・矢野の長女)という体制で、どの程度の保育実践ができたかということである。

当然、十分な活動はできなかったと思う。しかし、ほとんどが具体的な活動であるから、保育実践の水準を問わなければ、ある程度の活動はこなし得たかと思う。もちろん、同園の本格的な保育は、およそ2年後、東京の保姆練習科に送り出していた大津よしちと相原春が戻ってきてからである。

(2) 木町通小学校附属幼稚園維持方法

仙台の幼稚園は公立小学校の附属幼稚園の名称で発足する。人件費の大部分を実質県が肩代わりしているため公立としたいところだが、明治12年(1879)10月29日付の宮城県学務課の文書⁽⁴⁴⁾には「維持金ハ勿論補助金等モ下付不致モノニ付假令該校附属ノ名アルモ其實私立ニ係ルモノニシテ木町通小学校ノ教員中

土	金	木	水	火	月	
同	同	同	同	同	会 室 集 内	三十分
木片組ミ方及ヒ粘土細工	木箸細工（豆ヲ用ヒテ六面形及ヒ日用器物等ノ形体ヲ模造ス）	唱歌	木箸細工（箸ヲ折りテ四分ノ一以下分数ノ理ヲ知ラシメ或ハ文字及ヒ数字ヲ作ル）	計數（一ヨリ百ニ至ル）	博物或ハ修身ノ等ノ話	四十五分
環ノ置き方	形体積ミ方（第五箱ヨリ第六箱ニ至ル）	形体置き方（第九箱ヨリ第十一箱ニ至ル）	剪纸及ヒ同貼付	形体積ミ方（第五箱）及ヒ小話	形体置き方（第七箱ヨリ第九箱ニ至ル）	四十五分
縫 画	織 紙	畳 紙	歴史上ノ話	針 画	図画及ヒ紙ノ組方	四十五分
同	同	同	同	同	遊 喜	一時半

表3 第一ノ組の保育時間表

第二ノ組 幼稚園五年以上満六年以下

土	金	木	水	火	月	
同	同	同	同	同	会 室 集 内	廿分
同	同	同	同	同	唱 会 歌 集	卅分
鈍三角 第七恩物	第六恩物 長方体同ク縦及横ニニブスル者	第七恩物 正三角	第五恩物 立方体同 斜ニニブ及四ブスル者	第七恩物 両等辺 直三角	第三恩物 第四恩物	二十分
織 紙	知 慧 板	組 板	修 身 歴 史 上 小 話	計 数	画ノ説明	二十分
模 型	同	同	同	同	体 遊 操 戯	廿分
休	摺 紙	剪 紙	組 紙	繡 紙	刺 画	廿分
休	同	同	同	同	昼 飯	卅分
休	同	同	同	同	遊 自 戯 由	一時
休	図 画	置 箸	連 板	豆 工	第七恩物 直三角	三十分
休	同	同	同	同	遊 戯	卅分

第一開誘室 幼稚園五年以上満六年以下

表4 明治14年頃の第一開誘室の保育時間表⁽⁴⁰⁾

差繰授業ノ儀ヲ單ニ認可セラル、所トナレバ決シテ公立ノ名目ヲ附スヘキモノニ無之」(下線部前村)とあり、同園は「私立」であり「公立」でないことを強調している。また、他の文書においても仙台区木町通小学校附属幼稚園の名称自体が誤解を招くので不適当としている。設立当初のこの園は県の学務課が保証する日本で最初期に属する私立幼稚園なのである。

その点は、東京、鹿児島、大阪の幼稚園との大きな違いである。この3園は経費上もかなり自由がきいたかと思われる。鹿児島では豊田の給与だけでも月50円であり、施設、備品等に至るまでかなり自由に予算が使えたようである。いっぽう、小学校教師有志の設立である仙台区木町通小学校附属幼稚園は、経費的にはかなり厳しい状況でスタートせざるを得なかった。

明治12年(1879)5月12日付の「木町通小学校附属幼稚園維持方法」によると同園の予算は次のようである⁽⁴⁵⁾。

<収入>

保育料収入 七円五十銭 ※但入園幼稚三十名ヨリ当分一名ニ付金廿五匁宛収納ノ積リ

<支出>

校舎借舎賃 三円

恩恵物品費 貳円廿五銭 ※但当分一名ニ付金七匁五厘掛ノ見込

薪炭並筆紙

墨ノ諸雑費 壹円廿五銭

小使給料 壹円

<差引>

無銭

これには幹事、保姆(2名)、保姆助手等の給与が書かれていないが、木町通小学校教職員の兼務のかたちをとっているからである。また、諸費に関して木町通小学校の校費から補填もあったであろう。東京、鹿児島、大阪に比べたら、経費的には微々たるものであったかと思われるが、こうした経済的に厳しい中でも最初期の幼稚園を設置したという点は高く評価すべきである。

(3) 仙台区木町通小学校附属幼稚園の変遷

東京と鹿児島の幼稚園は、師範学校の幾多の改革改編に伴って相応に歴史的変遷を重ねているが、一貫して官立、公立、国立として存続している。大阪の幼稚園は、府立であったのは初期の数年だけで、渡辺昇が府知事を辞めた途端に廃園が決定されている。その後、氏原はじめ有志の努力により私立として維持されるが、後、区立幼稚園となっている。

仙台の幼稚園は、設立当初は、あくまでも私立幼稚園であった。その後、公立、私立、父母教師会立、市立、私立と変遷しているが、他の3園に比べ最も厳しい苦難の道を歩んできたと言える。『創立百三周年記念誌 あゆみ』を参考に変遷の概略を示すと以下の通りである⁽⁴⁶⁾。

明治12. 6. 7 「仙台区木町通小学校附属幼稚園」発足。園児20名。幹事矢野成文、保姆庵原俊、南良、保姆事務(助手)矢野秋。定禅寺通櫓丁三番地。

明治13. 4. 1 立町東二番丁角に園舎を借り「木町通小学校附属幼稚園」とする。

保育料を改訂。上等50銭、中等25銭、下等10銭、貧困の場合は無月謝でも可とし

- た。入園児が一挙に26人増え定員48名に達した。
- 明治13. 7. 30 大津よしち、相原春、卒業帰県。
- 明治13. 8. 17 大津よしち、相原春の担任発令（月給7円）。
- 明治14. 11. 10 公立仙台幼稚園として独立設置を県に申請（5日）、認可。仙台区元鍛冶町十五番地（借地）。11月30日、園名を「仙台幼稚園」とする。定員48名（実際は男29名、女21名、計51名入園）。保姆（2名）大津よしち、相原春、保姆助手（2名）矢野秋、黒沢^{この}之。11月19日、矢野成文に園長委嘱（月給9円半）。
- 明治16. 6. 13 仙台区会、「仙台幼稚園」の廃止を議決。
- 明治16. 10. 24 私立幼稚園「仙台区共立幼稚園」として継続。
- 明治17. 9. 22 仙台区より、「公立幼稚園設置申請」（9月13日付）が許可。「公立仙台幼稚園」となる。仙台区南光院丁三番地。矢野成文 月俸2円／大津よしち 月俸7円／細谷なほ 月俸1円。
- 明治19. 10 移転。「仙台区東二番丁小学校附属幼稚園」となる。東二番丁小学校校長真山寛園務を管理。
- 明治19. 12. 18 矢野成文、東二番丁小学校准訓導を命ぜられる。
- 明治24. 6. 7 パリ開催の万国博覧会から、多年幼児教育に貢献した功績により賞状と銀牌を贈られる。
- 明治27. 1. 12 矢野成文死去。享年64歳。
- 明治29. 4. 1 東二番丁小の所管を離れる。市立「仙台市幼稚園」となる。
- 明治30. 11 橋本よしち、園長事務取扱となる。
- 大正5. 4. 1 3月31日付で「仙台市幼稚園」廃止。「仙台市東二番丁尋常小学校附設幼稚園」となる。
- 昭和4. 11. 23 創立50周年祝賀会。
- 昭和7. 3. 31 橋本よしち退職、勤続52年。
- 昭和14. 10. 7 第7回全国幼稚園関係者大会を東二小講堂で開催（7～8日）。
- 昭和16. 4. 1 「仙台市立東二番丁国民学校附属幼稚園」と改称する。
この頃の在園児数（5クラス編成） 昭和16年度 男 82名 女 82名 計164名
／昭和17年度 男 108名 女 102名 計210名
- 昭和20. 7. 9 仙台空襲により園舎全焼。
- 昭和20. 10. 31 幼稚園廃止。
- 昭和28. 4 東二番丁小学校地内に父母有志による父母教師会立の幼稚園舎復興、落成。
- 昭和29. 3. 1 東二番丁小学校父母教師会立「仙台市東二番丁幼稚園」設立認可。
- 昭和29. 4. 12 復興第1回入園式挙行。
- 昭和36. 8. 4 全国造形教育研究大会会場園となる（4～6日）。
- 昭和40. 10. 17 第8回NHK全国図画コンクールにおいて学校特賞を受け、賞牌受賞。
- 昭和49. 3. 30 「仙台市立東二番丁幼稚園」として設立認可。
- 昭和54. 6. 7 創立100周年記念式典。4学級 園児数118名。
- 平成21. 3. 17 仙台市議会、2010年4月、民営移行を前提に「仙台市立東二番丁幼稚園」の廃園方針が議決。4月1日、4学級、園児数85名。
- 平成21. 6. 6 創立130周年記念式典。

平成22. 4. 1 「学校法人曾根学園東二番丁幼稚園」となる。

明治14年(1881)11月、この園は私立から公立となるが、それから1年にも満たない明治15年(1882)秋には、仙台区会は同園廃止を議決する。矢野成文らは『『幼児の教育は一日たりとて休むことはできぬ。教員たちが申し合わせ、無月俸で出園保育する』と申し出があるので、その心をかなえてほしい』と訴えている。

仙台区長松倉恂は県に対し「仙台区幼稚園自費保育」の伺いを出し、明治15年(1882)9月28日に許可されるが、同年12月22日、仙台区会で幼稚園廃止決議は再議の上撤回されている。しかし、翌年明治16年(1883)6月13日、仙台区会は再び「仙台幼稚園」の廃止を議決する。

この時、学務委員大立目克詣や矢野成文は宮城県令に対し、激しい抗議をしている。大村榮は矢野の抗議文(部分)を紹介している⁽⁴⁷⁾。

抑、教育ノ事ハ中々一朝一夕ニテ其結果ヲ看ル能ハザルモノナレバ之ヲ永遠二期スルトノ儀ハ閣下ノ能ク御存ジアル所ナリ。然ルニ一年ハ区費多端トテ之ヲ廃シ、一年ハ田穫不熟ヲ以テ之ヲ止メナバ、教育ハ却テ人民敢為ノ鋭氣ヲ挫キ、子弟進取ノ精神ヲ蕩カスノ具トナランノミ。

また、大村は、区議会の「(幼稚園は幼児の)脳力ノ發育ヲ妨ゲテ遲鈍ニ陥ラシムルノ恐アルノミナラズ、衛生上ニ於テモ亦害アルコト少カラズト現今泰西諸国ニテ有名ナル学士ノ主張スル説アリ。然ラバ即チ幼稚園ノ如キハ教育上必要ノ者ト為スベカラザルモノノ如シ。」という主張に対して、矢野は欧米では年を追うごとに幼稚園は増加し「区議會議員カ駁撃ハ全ク見込違ヒノ極点ニ至リタルモノ」と反撃したとしている。しかし、矢野らの要求が受け入れられることはなく、同園は廃園となり、私立「仙台共立幼稚園」となる。しかし、翌年の明治17年(1884)9月22日、仙台区より提出された「公立幼稚園設置申請」(同年9月13日付)が許可され、同園は再び「公立仙台幼稚園」となる。この時、保姆の橋本よしちは以前と同じ月俸7円であるが、矢野成文は以前の月俸9円半が2円に下げられており、言う言葉がない。

東二番丁幼稚園は、昭和20年(1945)7月9日、仙台空襲により園舎が全焼し、同年10月31日、幼稚園は廃止された。戦争は「幼児の園」すら焼き尽くすのである。

昭和25年(1950)頃から、東二番丁幼稚園の復活運動が活発になり、再三仙台市当局に復活陳情をするが当局の回答は「戦災義務教育の復興と都市計画の実施のため不可能」であった。そこで、関係者らは「町内会、父母教師会の総力をあげ、基金を募り、園舎を復興建築し、教具教材を購入」して、昭和29年(1954)3月1日、県から東二番丁小学校父母教師会立「仙台市東二番丁幼稚園」の設立許可を得ている。8年半のブランクを経ての復興である。

いずれにしろ、この園の歴史は、幾多の苦難に遭遇しながらも、矢野成文の犠牲的精神や、50年以上続いた大津よしちの献身的な活動、保育者、保護者、関係者らの幼児教育に対する強い期待と熱心な支援活動によって、この園が130年もの長い期間「名門幼稚園」として存続し得たことを示している。

筆者は、平成22年(2010)3月末、仙台市立東二番丁幼稚園を訪問したが、同園が同年4月から私立幼稚園になるという事実を聞いて唖然とした。平成21年(2009)3月17日、またしても仙台市議会は民営化を前提に市立東二番丁幼稚園の廃園を決定したのである。当然、同園関係者は大きな反対運動を展開したが、市議会の決議を覆すことはできなかった。

幼稚園は、義務教育という法的保護がないだけに、その時々政治的状況、経済的状況によって簡単に公立が民営化され、補助金が削減されることになる。「建学の精神」を誇る私立幼稚園が個性豊かな幼児

教育を展開する上で重要であることは言うまでもないが、経済的事情を理由に公立を容易に私立にすることの背景には、幼児教育こそ教育の基盤である、という認識の欠如があるのではないかという疑念は残る。

4 仙台区木町通小学校附属幼稚園設置の史的位置

(1) 東北・北海道における先駆性

仙台区木町通小学校附属幼稚園は、東北・北海道における最初の幼稚園である。わが国4番目の幼稚園が東北の仙台に誕生しフレーベル主義保育を実践した先駆性は高く評価すべきである。人口が稠密な東京、大阪では年を追うごとに幼稚園が増えていくが、仙台では同園設置から約25年ほど後発の幼稚園ができなかったという点は鹿児島県に似ている。

明治17年(1884)に文部省から「学齡未滿の幼児の小学校入学禁止の通達」が出されたこともあって、宮城県では「本県仙台区ヲ除ク外未タ幼稚園ノ設ケアラサルヲ以テ学齡未滿ノ幼児ハ学校ニ入レー室ヲ設ケ専ラ遊戯ヲ主トシ身体ヲ保育スルノ方法ヲ取調中ナリ」(文部省年報)という報告をしている。ただし、明治18年(1885)の年報にも同様の記述があるがこれを実施したとは書いていない。

この年の宮城県の報告には仙台の幼稚園について「該園ハ園長一名保母二名ヲ以テ管理シ幼児九十名を保育セリ之ヲ前年ニ比スレハ保母一人減スト雖トモ幼児は六十一人ヲ増加シ其事業モ亦漸次上進スル状況アリ是レ幼児ノ保育ヲ重スルモノ年々ニ増加スルニ因ルモノナリ」とあるように、行政側ははじめ一般の人々の間にも幼児教育の必要性が少しずつ理解されていったことがわかる。

宮城県における2番目以降の幼稚園設置年⁽⁴⁸⁾は、『宮城県教育百年史』、『宮城県幼稚園教育百年史』、『仙台市統計』などの資料によって、あるいは同書中でもかなりまちまちであり1、2年のずれはあるが、明治38年(1905)の私立宮城養稚園(東二番丁)、明治40年(1905)5月の米人婦人宣教師ミス・フェルプスによる私立仙台幼稚園(元寺小路。仙台育児院幼稚園)、同年の石巻幼稚園(石巻市立町)、明治42年(1909)の私立青葉幼稚園、明治43年(1910)の私立花壇幼稚園、同年の仙南幼稚園の順番である。この6園が宮城県における幼稚園第二グループと言える。

『宮城県幼稚園教育百年史』によると、二番目にできた私立宮城養稚園(東二番丁)は、退役軍人で社会事業家の妻の坂しまが経営し、春日悦、植山みよが保母をしたキリスト教主義的な幼稚園であり、橋本よしちの東二番丁幼稚園とは対照的なものであったが、植山みよは橋本よしちと仙台師範学校時代の同級生で親密な交際があり、お互いに方向性は違っても励まし合う仲だったようである。

ちなみに、鹿児島県における2番手グループの幼稚園⁽⁴⁹⁾は、明治41年(1908)4月、報徳会の花田伸之助が設立した私立會友舎幼稚園(平之町)、明治45年(1912)4月の私立錦城學會幼稚園(易居町)、大正3年(1914)4月の私立研志舎幼稚園(西千石町)がある。

(2) 有志による私立幼稚園

文部省や地方行政組織が主導した幼稚園設置とは違って、仙台区木町通小学校附属幼稚園の設立が、矢野成文を中心とする小学校教師有志の手によって設置されたということは、最初期4園の中では異例である。早期の幼稚園で民間による設立には、明治13年(1880)4月1日、桜井チカが桜井女学校内に設立したキリスト教主義の幼稚園や、明治13年(1880)6月1日、民間有志で創設された大阪の愛珠幼稚園がある。仙台区木町通小学校附属幼稚園は、この2園より早いわが国最初期の「私立幼稚園」⁽⁵⁰⁾である(キリスト教系の幼稚園などでこれより早い私立幼稚園の設置はある)。

もちろん、東京、鹿児島、大阪の幼稚園に比べると、経営的には格段の差がある。こうした園では経費

すべてを「官」に頼るわけにいかないからである。

しかし、有志だけで幼稚園を設置し得たという歴史的事実は重要である。もちろん、経営に不安があるため、この園のように、行政機関に申請して私立を公立にする例はよくあるが、この園は有志による幼稚園設立の最初期の試みとして貴重な存在である。

(3) 幼稚園の存続・発展に対する苦闘の実例

仙台区木町通小学校附属幼稚園は、設立当初、実態は半官半民に近かった。しかし、県の学務課はあくまでも小学校教師有志が設立した「私立幼稚園」と見なしていた。同園は、そうした園がその維持・発展のためにどのような取り組みをしたかを示す好例となっている。

東二番丁幼稚園（旧仙台区木町通小学校附属幼稚園）の歴史は、幼稚園の存続と発展は、保育者、保護者、関係者らの幼児保育に対する熱意と努力を抜きには語り得ないことをよく示している。こうした点でこの園から学ぶべきものは大きい。

〔注〕

- (1) 矢野成文手記「巻八 付録」、『幼稚園保姆及び母親の心得』所収、宮城県図書館蔵、明治17年～26年
- (2) 矢野成文手書き「矢野成文履歴書」、宮城県公文書館蔵、明治15年
- (3) 大村榮『養賢堂からの出発 教育百年史余話Ⅰ』、ぎょうせい、昭和61年、p. 57
- (4) 同上、p. 129
- (5) 矢野成文編『小学日課表用法』、国立国会図書館蔵、明治11年
- (6) 仙台市立東二番丁幼稚園創立130周年記念事業実行委員会『創立百三十周年記念誌 あゆみ』平成21年、p. 32
- (7) 宮城県教育委員会『宮城県教育百年史』（第一巻、明治編）、ぎょうせい、昭和51年、p. 176
- (8) 同上
- (9) 千葉昌弘「若生精一郎－その培根小学校における教育活動と自由民権運動の軌跡－」、『仙台市立木町通小学校百年史（培根 百年のあゆみ）』、仙台市立木町小学校、昭和49年、p. 38
- (10) 前掲、大村榮、pp. 130-132
- (11) 同上、「民権教師若生精一郎の生涯」、pp. 123-142
- (12) 前掲、大村榮、pp. 136-139
- (13) 前掲、矢野成文手記「巻八 付録」
- (14) 前掲、大村榮、pp. 133-134
- (15) 前掲、矢野成文自筆「矢野成文履歴書」
- (16) 前掲、矢野成文手記「巻八 付録」
- (17) 前掲、東二番丁幼稚園創立130周年記念事業実行委員会、p. 32
- (18) 同上、矢野善孝「東二番丁幼稚園に係るいくつかの謎」、pp. 56-57
- (19) 関信三手紙、宮城県学務課宛、宮城県公文書館蔵、明治12年3月10日付
- (20) 大津よしち兄の宮城県学務課宛届出（電報添付）、宮城県公文書館、明治12年3月11日
- (21) 宮城県学務課から大書記官への伺、宮城県公文書館、明治12年3月17日
- (22) 川嶋保良「明治－大正期・草の根の有職婦人像（その二） 幼稚園保姆 橋本よしち」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』、昭和女子大学女性文化研究所、1990年、pp. 31-44
- (23) 同上、p. 37
- (24) 同上、p. 37
- (25) 同上、p. 37
- (26) 前掲、東二番丁幼稚園創立130周年記念事業実行委員会、p. 57
- (27) 白極誠一「木町通小学校附属幼稚園設立伺」、宮城県公文書館蔵、明治12年5月9日
- (28) 前掲、東二番丁幼稚園創立130周年記念事業実行委員会、p. 36
- (29) 矢野成文「木町通小学校附属幼稚園開業式ノ際ニ同園幹事 矢野成文朗読スル所ノ祝辞」、宮城県教育委員会『宮城県

教育百年史』(第四卷、資料編)、ぎょうせい、昭和54年、p. 280

- (30) 水野浩志・村山貞雄「関信三の『幼稚園創立法』(明治十一年)」、日本保育学会『日本幼児保育史 第一巻』所収、フレール館、昭和48年3版(昭和43年初版)、p. 107
- (31) 岡田正章『『幼稚園創立法』解説』、『明治保育文獻集 別巻』所収、日本らいぶらり、昭和52年、p. 46
- (32) 前掲、水野浩志・村山貞雄、p. 107
- (33) 同上、p. 107
- (34) 「縣治年表鹿児島縣」、鹿児島県立図書館蔵、執筆者、執筆年共に不祥
- (35) 前村晃(執筆者代表)・高橋清賀子・野里房代・清水陽子『豊田英雄と草創期の幼稚園教育』、建帛社、2010年、p. 226
- (36) 前掲、水野浩志・村山貞雄、p. 107
- (37) 同上、p. 107
- (38) 氏原銀「思い出くさ」、竹村一『幼稚園教育と健康教育』所収、ひかりのくに昭和出版、昭和32年、p. 160
- (39) 前掲、東二番丁幼稚園創立130周年記念事業実行委員会、pp. 36-37
- (40) 宮城県幼稚園協会『宮城県幼稚園教育百年史』、昭和55年、p. 13
- (41) 前掲、「木町通小学校附属幼稚園設立伺」、規則の部分
- (42) 同上
- (43) 前掲、宮城県幼稚園協会、p. 13
- (44) 県学務課から仙台市長宛手書文書、宮城県公文書館蔵、明治12年10月29日付
- (45) 白極誠一「木町通小学校附属幼稚園維持方法」、宮城県公文書館蔵、明治12年5月12日
- (46) 前掲、東二番丁幼稚園創立130周年記念事業実行委員会、pp. 32-55
- (47) 前掲、大村榮、pp. 146-147
- (48) 仙台市『仙台市統計一斑』(第3冊・第6冊)、国立国会図書館蔵、明治40年・同43年、p. 45・p. 44(私立仙台幼稚園は明治39年設立か)。ほか数点の資料も参照した。
- (49) 鹿児島市編『鹿児島市統計書』(第8回・大正4年)、国立国会図書館蔵、大正7年、p. 19
- (50) 湯川嘉津美もその著『日本幼稚園成立史の研究』(風間書房)において「厳密に言えば私立の形態」(p. 275)としている。2001年